

水稻穂肥研修会資料

甲 賀 農 業 協 同 組 合
甲賀農業農村振興事務所農産普及課

1. 生育の概況と気象経過

～早生品種の生育は平年より遅れています～

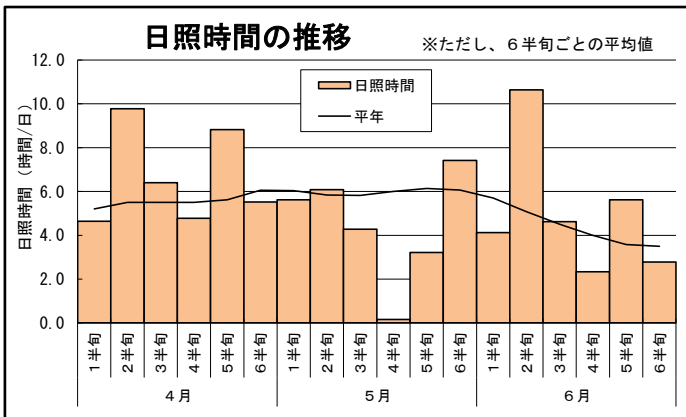
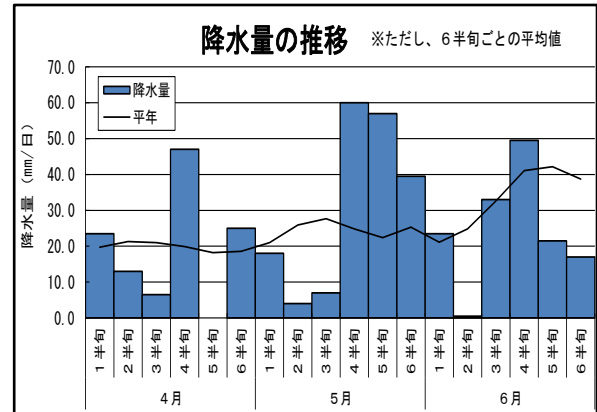
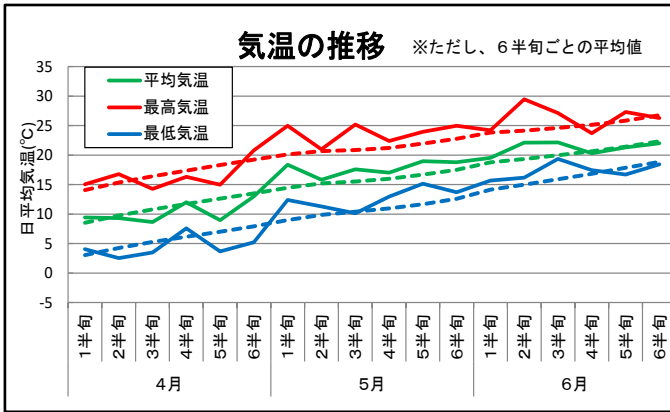
1) 気温

4月第2～第3半旬および第5～第6半旬を除いて、平年に比べ気温は高く経過しました。直近では平年並みの気温となっています。

2) 降水量・日照時間

4月第4半旬、5月第4～6半旬、6月第4半旬にはまとまった降雨がありました。それ以外は降雨が少ない期間が続きました。梅雨入りは過去最速の5月16日でした。

日照時間は、4月第2、5半旬、5月第6半旬および6月第2半旬を除き、平年並かそれ以下となりました。特に入梅後の5月第4半旬を中心に、極端に日照時間が少ない期間が見受けられました。



注) 2021年アメダスのデータ

また、「半旬」とは5日間を示し、例えば、毎月1～5日を「第1半旬」、毎月6～10日を「第2半旬」、毎月11～15日「第3半旬」といいます。

2. これまでの生育経過

平年に比べ育苗期の4月、特に下旬が低温で、苗の生育はやや遅れ気味でした。

4月下旬の移植では、強冷風による植痛みが一部みられましたが、5月に入ってからからの移植では比較的活着は良好で、以後は植痛みはほとんどなく、生育は順調でした。

5月中旬以降の高温により、早くから藻類の発生が多いほ場や還元障害が発生しているほ場が散見され、日照不足の影響等から、5月下旬までは平年より分けつがとれるのが遅い傾向がありましたが、6月に入って全般に高温多照に経過していることから、平年並みに戻りつつあります。

また、雑草の発生状況は、藻類の多発生と残草としてヒエやホタルイ等の発生が見られます。

2. これからの栽培管理

(1) 穂肥の施用

- JA特別栽培米（「コシヒカリ」、「キヌヒカリ」、「みずかがみ」）の生産は、決められた施肥量以上の肥料を散布することができませんので、ご注意ください。
- 下記の基準を目安に、適期に施肥してください。
- 「キヌヒカリ」では、乳白米・背白米・基白米が多いことで等級が低下している場合は、籾数制限と登熟期の肥切れ防止のため、2回目(出穂18日前)の穂肥を重点に行います。
- 一発肥料型（いち太郎あお）の場合、穂肥は不要です。
- 必ず、幼穂長を確認して適期を把握することが重要です。（今年は特に全体的に生育が平年より遅れており、ほ場間の生育差が大きいので、必ず事前確認しましょう）

☆ キヌヒカリ 穂肥時期の目安と基準量(10ア当たり)

(肥料:「このう有機 かるか50」)

地帯	穂肥時期の目安と10ア当たり施肥量		予想出穂期 (平坦地域)
	出穂25日前 穂肥1回目(7月7日頃)	出穂18日前 穂肥2回目(7月14日頃)	
一般(壤土など)	このう有機かるか50 25kg	—	8月2日頃
砂壤土地帯	<u>このう有機ゆめ80</u> 10kg	このう有機かるか50 20kg	

※ 5月10日移植での目安。砂壤土地帯の出穂25日前のみ「このう有機ゆめ80」

● 株張り・葉色別の穂肥の調整

株張り	葉色	穂肥の時期と10ア当たり施肥量		
		出穂25日前(幼穂1mm)	出穂18日前	出穂15~16日前
大	濃い			かるか50 25kg
	薄い		かるか50 25kg	
標準	濃・淡	壤土:かるか50 25kg		
		砂壤土:ゆめ80 10kg	かるか50 20kg	
小	濃い	※かるか50 25~30kg		特別栽培米・環境こだわり米の穂肥施肥量の上限は合計25kgまでですので、ご注意ください。
	薄い	※かるか50 30kg		

※ 株張りの標準：茎数が25本/株。葉色が濃い：葉色が4.0以上。

☆ コシヒカリ、日本晴の穂肥時期の目安と基準量(10ア当たり)

(肥料:このう有機 かるか50)

品種	穂肥時期の目安と10ア当たり施肥量			予想出穂期 (平坦地域)
	出穂25日前 (幼穂1mm)	出穂18日前 (幼穂長10mm程度)	出穂11日前	
コシヒカリ		標準:15kg (7月14日頃)	標準:10kg (7月21日頃)	8月1日頃
		白未熟粒対策:10kg (7月14日頃)	白未熟粒対策:15kg (7月21日頃)	
日本晴	25kg (7月13日頃)			8月7日頃

※ コシヒカリは5月10日移植、日本晴は5月3日移植での目安(平坦地域を想定)

(2) 水管理 ～出穂の前後各3週間、合計6週間は湛水管理を！～

水稻は穂が出る頃に最も「水」を必要とします。幼穂形成期(穂肥時期)が近づいたら中干しは中断して間断かんがいし、幼穂形成期以降は水を切らさない管理を行ってください。

●良質米生産とともに、**カドミウム**吸収抑制のために、出穂3週間前から出穂3週間後の合計6週間、湛水管理を行きましょう(下図)。

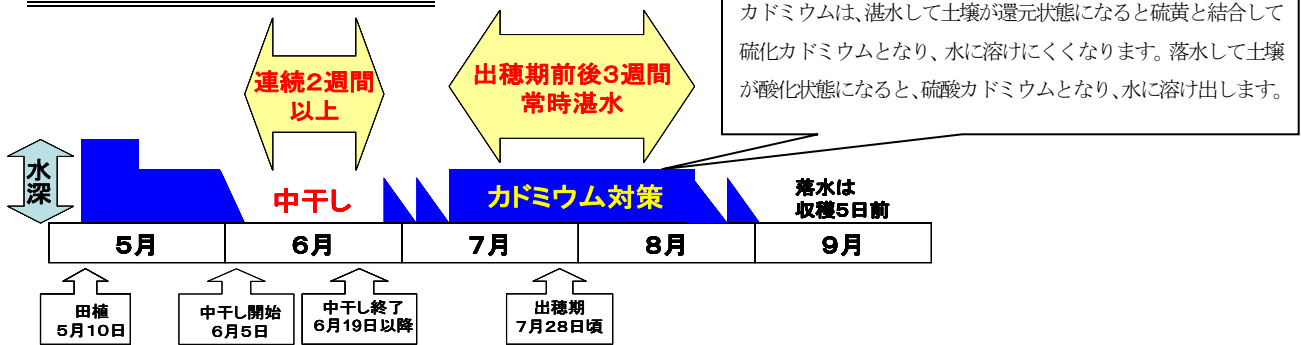


図.田植から収穫までの水管理(コシヒカリ5月10日植の目安)

(3) 穂いもちの防除

- JA特別栽培米の生産に取り組む方々は、本田用のいもち剤などは使用できないので、ご注意ください。
- 一般栽培の方は、早生・中生品種ともに、発生状況を確認して防除してください。防除効果が高く、飛散の危険性が低い「粒剤」を基本とします。

穂いもち防除の留意点

- 無人ヘリや集落の共同防除地域
殺虫剤(カメムシの防除)のみ散布します。
穂いもち防除は個人で実施してください。
- 一般栽培の方
葉いもちの発生時期は「平年並」、発生量は「平年並」の予報(6月23日付け病害虫発生予報第5号)となっていますが、今後も葉いもちや穂いもちの発生状況に注意してください。
穂いもち防除(粒剤の散布)の場合は、早生・中生品種ともに、できるだけ早く散布してください。



穂いもち

粒剤

- 湛水状態で(水深3cm以上)でムラ無く散布します。
- 散布後7日間は湛水状態(止水)を保ちます。

液剤・粉剤を散布する場合

- 風の無い時を選び、周辺に飛散しないよう噴頭を上に向けたり、散布圧を過度に強くしないようにします。
- 特に周辺に収穫間近の作物(例:野菜)が栽培されているところでは絶対に飛散しないよう注意して散布します。
- 散布後7日間は湛水状態(止水)を保ちます。

●穂いもち防除薬剤(令和3年6月26日時点での登録確認)

薬剤名	使用量	使用時期	使用回数
コラトップ粒剤5	3~4kg/10a	出穂30日前~5日前まで	2回以内

(4) 斑点米カメムシの防除 ～草刈り＋薬剤防除で防除効果を高めよう～

近年、カメムシによる斑点米が多発し、品質を落としています。薬剤防除と、畦畔の草刈りを組み合わせ、防除効果を高めましょう。とくに畦畔草刈は、地域全体で取り組みましょう。

畦畔草刈のポイント

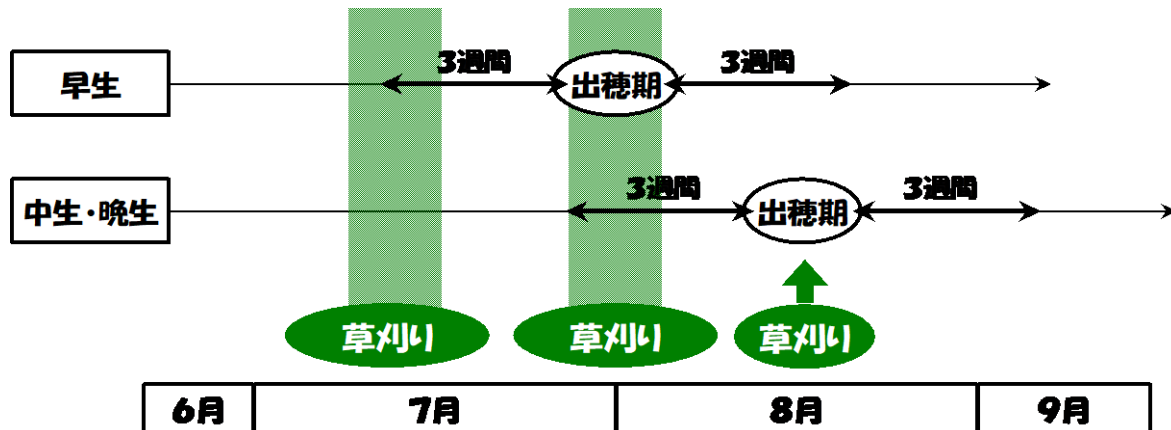
畦畔のイネ科雑草(特に雑草の穂)はカメムシのエサとなり、誘引源や増殖源となります。そのため、イネの出穂期頃に稲穂にカメムシを寄せ付けない管理が重要です。

●畦畔のイネ科雑草を出穂させないようにするため、イネの出穂期の2～3週間前と出穂期頃の2～3回の草刈りを実施します。

●中・晩生品種と早生品種が混在しているところでは、8月下旬にも草刈りするとさらに有効です。



カメムシと斑点米



●斑点米カメムシの防除薬剤 (令和3年6月26日時点での登録確認)

薬剤名	10a当たり使用量	使用時期の目安	使用回数
スタークル粒剤	3kg	出穂7～10日後 ※ただし、収穫7日前 までに散布すること	3回以内 JA 特別 栽培米は 1回ま で。
スタークル粉剤DL			
スタークル顆粒水溶剤	薬剤50gを100リットルの水に 薄めて散布(2000倍)	農薬を使用する場合は、 間違いの無いようにラベル を注意事項までしっかり と確認して使用してください。	
スタークル豆つぶ	250g (水深 2～3cm)		

(5) 刈り遅れの防止 ～収穫適期は青籾残存率10～15%～

近年、夏期高温により成熟期が早まる傾向が生じており、収穫作業の開始が遅れるため、胴割粒や茶米の発生が増加しています。胴割粒や茶米の発生防止として、刈り遅れないようにしましょう。

青籾残存率 50%	・・・	収穫1週間前
青籾残存率 20%	・・・	収穫開始
青籾残存率 10～15%	・・・	収穫適期

ほ場の水口付近などの成熟が遅れている部分は、刈り分けしましょう。

「水稻の台風対策(出穂前)」

1. 台風通過前の対策 事前に水を十分張って、排水路の詰まり等の点検・補修を行い、冠浸水時の速やかな排水に備える。
2. 台風通過後の対策
 - ①冠水した場合、葉先を水面に出すよう速やかな排水に努める。
 - ②冠水の著しいほ場においては、排水後、病害の発生動向に十分注意する。また、冠水や浸水の被害を受けた稲体は水分調整、肥料吸収等の機能が低下していることから、田面の過度な乾燥に注意する。